

シ
ロ
ツ
メ
ク
サ
☘



猫好きと野良猫

高校一年生、ある初夏の日。

幼馴染が野良猫と喧嘩している場面に遭遇してしまった。

俺とは違う高校の制服。道端に放り捨てられた、教材が入っているのか疑わしいほどに薄っぺらな鞆。

おそらく、俺と同じで下校途中なのだろう。無防備なスカート姿のまま両腕と両足をX字型に広げて、自分を大きく見せている。

対するは、たまに見かける大柄な雄猫。瞳は褐色、毛色は真っ黒だ。

俺と会った時には少しばかり偉そうな態度ながらも傍に寄ってきて撫でさせてくれるそいつが、今はどこか余裕を滲ませつつ気を張り詰めた様子で、自分よりも大きな人間の少女と睨み合っている。

猫同士の喧嘩は、格闘に入る前の威嚇のし合いだけでも勝敗が決まることがある。

幼馴染が自分の身体を大きく見せて強さを誇示しているのに対し、黒猫は毛を逆立てず、ただ視線だけで威圧している。見たところ、幼馴染の方が劣勢のようだ。

つて、何を冷静に分析しているんだ、俺は。

普段から気まぐれで猫っぽい言動が目立つからだろうか、幼馴染が猫と喧嘩するという奇怪な状況を当然のように受け入れてしまっていた。

しかし、動物愛護の精神を持つ人間として、この場をただ見ているわけにはいかない。

「おいスズカ、お前、何して」「シャアーツ！」

近づいて声を掛けた途端、振り向きざまに引つ掻かれた。

咄嗟に防御の姿勢をとったせいで、半袖のシヤツから露出した右腕に血がにじむ。

「なんだ、慎くんか。今ちよつと取り込み中だからどいててくんない？」

「人に怪我させてから言う台詞か、それが。いいから帰るぞ、ほら」

右手でスズカのシヤツの後ろ襟を、左手で二人分の鞆を掴む。

そのまま、スズカを引っ張るようにして歩き出した。

「ちよ、ちよつと何するのさ！ わたしに敵前逃亡させる気かー！」

「猫をいじめる奴を放っておくわけにはいかないだろ」

「いじめてるとは猫聞きの悪い！ 対等な縄

張り争いだよ！ ほら、ボスが勝ち誇った顔してるじゃん！ あいついつとも他所の縄張りに我が物顔で侵入するんだよー」

言われて立ち止まり、振り返る。黒猫はいつもの偉そうな態度でこちらを一瞥してから、悠々とした足取りで歩き去った。

スズカはまだ何か喚んでいるけど、いちいち相手をすると疲れるので黙って歩く。

喚き疲れたのか、それとも喧嘩相手が見えなくなつたからか、しばらく歩いたところでスズカの声が止む。手を離すと、ふてくされた顔で俺の隣に並んで歩き出した。

「で、本当のところは何があつたんだ」まさか本当に縄張り争いというわけでもないだろう。そう高をくくって尋ねると、牙を剥くようにしてこちらを見上げたスズカが睨んでくる。

「だからボスが縄張りを侵したんだって言ってんじゃん。まさか慎くん、信じてないな？」

「……信じる以前の問題だろ」

猫と人間では、同じ町にいても生きている世界が違う。

俺は猫に懐かれやすいから、この町の野良猫と接する機会も多い。

けど、俺には人間の世界があつて、野良猫には野良猫の世界がある。

それぞれの世界が時に交わりながら共存しているに過ぎない。

人間が他の人間の土地を侵さないようルールに従っているのと同じように、猫は猫のルールで縄張りを決めているのだ。

猫のルールで決められた縄張りには、人間であるスズカが組み込まれているはずはない。「前から言ってるんじゃない。あの日以来、わたしは猫の世界に片足突っ込んでるんだって。信じてないの、慎くんだけだよ」

「お前の戯言を信じる奴なんか、……いたな、そういや」

人の言うことを疑わないお人好しが約二名、そいつらが甘やかすから、スズカという暴走列車に燃料がくべられ続けているのだと思う。俺一人では制御し切れない。

あの日——俺とスズカが幼稚園の年長組だった頃のこと。

ちょうど、今と同じ梅雨明けの頃だったから、十年前ということになる。

スズカは、交通事故に遭った。母親と散歩をしている途中、帽子が風で飛ばされて、追いかける内に車道に飛び出したらしい。

母親とはぐれて、周りに人もいなかったため目撃者はなし。

事故に遭ったというのもスズカの曖昧な証言によってわかったことで、それらしい車の姿も見当たらなかったため、詳しい状況はわからない。

スズカの証言によれば、車に轢かれた上に電柱で後頭部を打ったらしい。間違はなく一大事だが、発見された当時のスズカは、少意識の混濁があるだけでびんびんしていた。よほど打ちどころがよかったのだろうかということでは話はいったが、謎というか、しこりが残る結論になったことは否めない。

その謎をさらにややこしくしたのが、スズカの話した『猫の世界』での冒険譚だ。ここでいう『猫の世界』とは、野良猫の社会構造を意味する抽象的な言葉ではない。

この世界で人間が高度な文明を発達させているように、猫が高度な文明を発達させて世界が存在する、ということだ。スズカは、この世界で事故に遭ってから目覚めるまでの間に、その『猫の世界』とやらに飛ばされて、世界を危機から救うために戦ったらしい。

平行宇宙が存在する可能性も、平行宇宙間の移動も、その中にこの世界と似た生物や文化を有する世界が存在することも、明確に否定できるだけの科学的根拠はない。

けど、スズカの話は荒唐無稽が過ぎて、俺

は幼心にも信じがたく、こう判断した。

——きつと、スズカは夢を見ていたんだ。

——事故のシヨックで、その夢を本当のことだと思っているだけだ。

意識が混濁していたという話だし、概ね間違いないと思う。周りの大人たちも、似た感想を抱いたに違いない。事故後のスズカの精神状態を憂慮してか、はっきりと否定することはなかったけど、受け流すような対応をしていたことを覚えてる。

「慎くんは当時から信じてくれなかったよね。それどころか、『絶対ありえない』なんて否定されて、シヨックだったなあ。わたし、あの時ちよつと慎くんのこと嫌いになったよ」
「……お前に嫌われたって、痛くも痒くもない」

ちよつとは悪かったと思ってるけど、まだ大人みたいに気を遣える齡じゃなかったし。言い訳してみた言葉は次々浮かぶけど、声には出ない。

その代わり、皮肉めいた言葉ばかり口を突いて出る。幼い頃からずっと変わらない、俺の悪い癖だ。

俺の家とスズカの家は、一車線の細い道路を挟んだ向かい側にある。

スズカが門扉を開けて自宅に引つ込んでいく姿を横目に見て、俺も向かい側の玄関扉を開けた。「たたいま」と言つて一度リビングに顔を出すと、ソファで洗濯物を畳んでいた母さんが顔を上げる。

「ああ、おかえり。木葉ちゃん、待つてるよ」
このは

「ん。スズカもすぐ来ると思う。くぬぎは？」
尋ねると、まだ来てないと首を横に振る。

無言で頷いてから、二階の自室に向かうべく階段を上がった。

階段を上がり切つて、三つある扉の内、一番奥まで歩く。コンコン、とノックをすると、中から「はい」と幼子のような声が届いた。

「あ、慎くん。ちよつと遅かつたですわね」

扉を開けて目に入るのは、声の印象と違わぬ、小学五年生くらいの少女。けど、それは小柄で童顔なので幼く見えるだけだ。実際には、俺とスズカの一つ下、中学三年生。

「ああ。ちよつと途中で……なんというか、トラブル？ に出くわして」

「だ、大丈夫だったんですか？」

ふにやつと柔らかく笑つていた顔が、一瞬で不安げな色に塗り替わる。その様子を少し可笑しく感じつつ、安心させるようにしっかりと頷いてみせた。

「大したことじゃない。ところで、くぬぎは？」
「あれ、連絡行つてないですか？ 急に委員会の仕事が入つたつて」

木葉は部屋の中央に広げっぱなしの折りたたみテーブルに手を突いて身を乗り出し、「ほら」と水色のカバーが掛つたスマートフォン画面を見せてくる。

グループ画面の一番下には確かに、見慣れたリスの絵のアイコンが表示されていた。

吹き出しには『急に委員の仕事が入つたから、勉強会は三人だけでやつて』とある。

一応と思い、自分のスマホでも確認する。

確かに同じメッセージの通知があつた。

「……気づかなかつたな」

「こういうのは、こまめに確認した方がいいですよ」

何故か得意げになる木葉に「はいはい」と返事をしてから、鞆を降ろす。

正方形の折りたたみテーブル、木葉の左隣にあぐらをかいて、ふと言つた。

「くぬぎ、図書委員だつて。定期試験前だつてのに、何を押しつけられてんだかな」

「テスト期間は図書室で勉強する人が増えるから、トラブルを防げるように司書の先生が見てるけど、先生に他の用事がある時にはくーちゃんが任せられることも多いみたいですよ」

そこまで騒ぐ人もいないし、自分も勉強する時間ができるからそこまで大変じゃないつて前に言つてました」

くぬぎは俺やスズカの一つ年上、木葉から見たら二つ年上の、高校二年生の幼馴染だ。木葉とは、おっとりした性格同士で馬が合うらしく、二人で話していることも多い。

「ふうん。……けど、一番教えるのが上手い奴が来れないつてなると……」

「だ、大丈夫ですよ。慎くんの方が得意な教科だつてあるじゃないですか」

それはそうだけど、人に勉強を教えることに關しては、逆立ちしたつて敵わない。俺は相手の立場に立つて考えることが苦手で、くぬぎにはそれができる。

四人が四人とも学校が違うにもかかわらず、たまに集まつて開催する勉強会が成立しているのは、学年がバラけているから学校ごとの単元の順序や進度が影響しにくいこと以上に、人に寄り添うのが得意なくぬぎの存在が大きい。

それに、マイペースな木葉と暴走特急のスズカ、この二人を俺一人で捌く自信もない。

目を改めた方が賢明だろうか。そう考えながら、ふと扉へと目をやつた。

「……そーいや、スズカまだかな。すぐ来る

「思ったんだけど」

「そうなんですか？」

「ああ、帰ってくる途中で会ったんだよ。さつき言ってたトラブルってのも——」

待つ間の話のタネくらいにはなるだろう。

そう思って、帰り道での出来事を話す。

「ああ、またボス猫さんですか。スズカちゃん、いつも困らせられてますからねえ」

「どうやら、あのデカイ黒猫がこの町の野良猫のボス格であることは、スズカだけでなく木葉も認識しているらしい。」

「いつもって、……じゃあ、あのボス猫とは何度も喧嘩してるってことか」

スズカが、明らかに転んだだけでは済まない量の擦り傷や切り傷を作ってくることがあるのは知ってたけど。まさかそれも、野良猫同士の縄張り争いの結果なのだろうか。

「そうみたいです。あのボス猫さん、他の猫ちゃんとの縄張りに侵入することがよくあるんですけど、スズカちゃんは特にナメられてるらしくって」

ごく自然にスズカを野良猫と同視する語り口が気になったけど、話の腰を折りたくないんで突っ込まないでおく。木葉はテーブルに両肘を突いて続けた。

「ほら、猫って縄張りを示すために、マーキ

ングするでしょう？ けど、スズカちゃんは立場や身体が人間な分、他の子と同じようには匂いをつけられないから、そういう面では不利なんだから言ってみました」

「……ああ」

思わず、呻き声を上げてしまう。確かにあいつが猫と同じような匂いづけをしていれば、お巡りさんが飛んでくるだろう。そもそも、人間と猫じゃ匂いの質が違うだろうし。

全くやましいことはないけど、幼馴染の女子の匂いについて考えている高校生男子って、傍から見たら変態くさいだろうな。そう思ってた、この思考は中断する。

「……けど、そうか」

不意に思い至ることがあって、呟く。

小首を傾げる木葉に、大したことじゃないと示すように軽く首を振った。

「この町の中で、俺らの家の周りだけあまり猫を見かけないのは、スズカの縄張りだからだったのかな、と思っただけだ」

声を出してみると、ますます腑に落ちる。

木葉も納得したように頷いていた。

「きつとそうですよ。やっぱり、慎くんからしたら残念ですか？」

「……どうしてそう思う？」

「たまに、すつごく満たされた顔で猫ちゃん

に囲まれてるところ、見かけますから」

差し出されたスマホの画面に映るのは、公園のベンチで数匹の猫にじゃれつかれている不愛想な男子を写した写真。間違いない俺だ。

「おい、こんなのいつの間撮ったんだ」

「私じゃなくて、くーちゃんが送ってくれたんです。いつもより穏やかな顔してますねえ」
家から少し離れた公園だから、油断していた。この写真を撮ったのはくぬぎらしいけど、口振りからして、木葉も同じような光景を目にしたことはあるのだろう。

写真を消せなんて言っても無駄なことはわかっている。木葉もくぬぎも、変なところで頑固だから。その代わり、一つ釘を刺しておく。

「……頼む。スズカには、内緒にしてくれ」

「それは、わかりましたけど。……スズカちゃんも、知ってるかもしれないですよ？」

あいつにだけは見られていないことを祈るしかない。

あいつなら目撃した時点で確実にからかってくるから、今のところ兆候がないということだ。とは、知らない可能性が高いということだ。そう、信じた。

冷や汗が一筋、額を伝うのを感じながら、俯き気味に黙り込んでいく。

「なーにが、わたしには内緒だった？」

扉がひらき、今の状況では最も見たくない、スズカのニヤニヤ顔が現れた。

「な、なんでもないですよ。本当になんでもないんです！ ね、慎くん？」

木葉が焦った顔で両手を振り、俺に目配せをする。

この状況にその対応は、非常にまずい。俺だけならポーカーフェイスでやり過ごせるのに、木葉の態度があらさま過ぎて、スズカのニヤニヤが加速している。

「ええ？ ほんとに？」

「気色悪い声出すな。それよりスズカ、ずいぶん遅かったな」

多少強引になったが、別の話題に持ち込む。スズカは後ろ手に扉を閉めながら、ぼつの悪そうな顔で近寄ってきて、木葉の右隣、俺の向かい側に座り込む。

「慎くんが悪いんだよ。カッチカチに頭が固い慎くんにわたしの話を信じさせるために、わざわざ探し物してきたんだから」

人のせいにするな。そんな声が出る前に、スズカは手のひら大の何かを卓面に置く。

パステースだった。硬質な黒い表面に、銀色で肉球をかたどった模様が印刷されている。経年劣化のためか、細かな擦れや傷が多くて、

ぼろぼろだ。

「……なんだ、これ」

「もしかして、これって……『猫の世界』から持って帰ってきたもの、ですか？」

キラキラと目を輝かせて、木葉がスズカの顔を見上げる。

スズカは得意げに胸を張って立ち上がり、バッチを掲げてみせた。

「その通り！ これは『猫の世界』を悪の侵略から護るヒーロー『マスクドキャット』に変身するためのアイテムなんだ！」

変身ヒーロー。まさに、こいつの好みそうな話だ。

「ねえねえスズカちゃん！ それ、どうやって使うんですか？」

同じく戦隊モノや変身ヒロインの好きな木葉が、興奮した様子で膝立ちになって訊く。

「この真ん中のマークをタッチすると、肉球認証によって機能が解放される！ 自動的に仮面や特殊装備が装着されて、正義の戦士『マスクドキャット7号』に変身するんだ！」

「……七匹もいるのかよ」

「わたしのあとにも二匹いたから、9号までいるよ！ 今はもっと増えるかも！」

「けど、何も起こらないですね」

木葉に言われて、気づく。

スズカは俺たちに説明しながら説明通りに動いているのに、変身していない。

「それが、こつちの世界に戻ってきてからは使えなくなっちゃったんだよね。この姿だと肉球がないから、そのせいで認証されないんだと思うけど……」

そこまで言うのと、スズカは気まずそうに目を伏せて、呻くような小声で続けた。

「そっか、これじゃ信じてもらうための証拠にはならないよね」

「いや、いいよ。……もう、そこまで疑ってるわけじゃない」

しょんぼりした顔でパスをポケットに仕舞ったスズカが、俺の顔を見て首を捻る。

確かに、これがスズカの作り話だと断じることは簡単だ。証拠として見せたパスだって、スズカの作り物だと結論づける方が、遥かに理に適っている。

けど、どうしてか疑う気になれなかった。

「慎くん……？ どうしたの、急に。変なもので食べた？」

「なんだその言い草は。……さっきまでは、信じる信じて、しつこく話してた癖に」

信じられないものを見るような目で疑うスズカと、思わず眉を顰めて言い返す俺。その間に割り込むように身を乗り出して、

木葉が取りなす。

「まあ、いいじゃないですか二人とも。とりあえずほら、テスト勉強しましょう、ね？」

きつと、スズカが「証拠」を見せてきたから信じる気になったわけではないのだろう。

この町の中で、この辺りにだけ野良猫が少ない理由。木葉と話していて、その推論が腑に落ちた時点で。

——否、もしかしたら、幼馴染が猫と喧嘩するという奇怪な状況を、当然のように受け入れていた時点で。

理屈ではなく直感として、あの話が事実だと、受け入れていたのだと思う。

そう思つてスズカを見てみれば、なんだか、猫みたいな耳が生えているように見える気が——つて、なんだあれ。気のせいなんてレベルじゃなく、はつきりと見えた。

スズカの頭に、猫みたいな耳が生えている。思わず素早く瞬きを繰り返すと、何度めかで見えなくなる。

白昼夢か何か、だったのだろうか。よくわからないけど、こんな幻覚を見るなんて。

どうやら俺も、スズカの戯言を信じるお人好しに仲間入りしてしまったようだ。

お姫様と王子様

その想いに気づいたのは、いつだったろう。

はつきりと自覚したのは、幼馴染のスズカちゃんに指摘されてからだ。小学五年生くらいの頃だったと思う。周りもみんな、そういう話題に敏感になる年頃だ。

けど、確かな自覚がなかっただけで、想いそのものは、ずっと前からあったのだと思う。

小学二年生？ それとも一年生？ ——うん。きつと、もつと前から。

これは、僕が幼稚園の年長クラスだった頃のこと。

「あつ」

短く叫ぶような声が聞こえて、園庭でボールを投げ合って遊んでいた僕とスズカちゃんは、咄嗟に振り向いた。

園舎の勝手口から出てきた木葉ちゃんが犬走の段差に足を取られ、前のめりに倒れていく、その瞬間が目に入る。

危ない、と呼びかけようとした声が喉に絡まって出てこない。手を伸ばしても届かない距離。一瞬のことなのに、どうしようもない

無力感が襲ってきて、全身が硬直する。

そんな僕の横を、サッと駆け抜けていく男の子がいた。

転んで起き上がれないまま嗚咽を洩らしている木葉ちゃんの横に屈み込んで、その顔を覗き込む。

「だいじょうぶか、このは」

男の子——慎くんが呼びかけると、木葉ちゃんは顔を上げる。

擦り剥いたおでこを労わるように、そっと手を伸ばして頬を撫でて、慎くんは頷いた。

「よかった、ちいさなキズで」

「ほんとに？ すぐになおる？」

「ほんとだよ。だから、ちゃんとキズをあらって、バンソーコーはろうな」

慎くんが言い聞かせる内に、先生が気づいて駆け寄ってくる。

その先生といくらか話したあと、木葉ちゃんが先生に付き添われて蛇口に傷を洗っているのを見て、慎くんは園舎の中に姿を消した。きつと、絆創膏を取りに行ってるんだ。

木葉ちゃんは、よく転んだりぶつかったりして、擦り傷を作っている。

その度に泣いちゃうけど、慎くんが絆創膏を貼って、「いたいのいたいのとんでけ」ってしてあげると、すぐに泣き止んで、笑顔が戻

るんだ。

そういう時の慎くんは、まるで木葉ちゃんのピンチに駆けつけるヒーローみたいで。

いつも僕は、そんな慎くんの姿を遠くから眺めていて。

「……いいなあ」

思わず、内に秘めていた想いが声に出してしまう。

こんなの、いけない。木葉ちゃんが泣いているのに、こんな風に思っちゃうなんて。

「なにが、いいなあ」なの？ くーちゃん」横から口を挟んできたスズカちゃんに、「ひやえっ？」と間拔けな声を返してしまう。目を向けると、ニヤニヤとした笑顔でこちらを

覗き込むスズカちゃんの姿があった。

「な、なんでもないよ、スズカちゃん」

「ほんとにいい？ くーちゃんもあんなふう

にシンくんにたすけてほしいんじゃないの？」

どうしてわかるの？ 言いそうになって、慌てて口を噤む。

スズカちゃんはまだ何か言おうとしていたけど、それより前に、慎くんが木葉ちゃんの手を引いて歩いてきた。

「くぬぎ、スズカ。このはも、もういっしょにあそべるって」

おでこに絆創膏を貼って、慎くんの後ろを

ついてくる木葉ちゃんは、頬を少し紅く染め、はにかんだ微笑みを浮かべている。

怪我が大したことなくてよかった。そう安心するのと同時に、少しだけ、二人の様子に胸を締めつけられたのも、無視できない事実で。

四人でボール遊びを続けながらも、僕はどこか、心ここにあらずといった気分でした。

僕、——^{はまいけ}浜池くぬぎには、幼馴染が三人いる。

一つ年下の慎くんとスズカちゃん、二つ年下の木葉ちゃん。

これまでずっと、幼稚園に入園するのも、小学校や中学校に入学するのも、高校受験を迎えるのも、当然ながら、四人の中で一番年上の僕が最初だった。

いつも仲良しなみんなと離れて、たった一人で新しい環境に飛び込まなければならぬ。そのことが毎回、心細かった。

今よりもずっと幼くて、新しい環境に飛び込むことも初めてだった三歳の頃の僕には、相応なプレッシャーだったと思う。

だから、同じ幼稚園に慎くんやスズカちゃんが通い始めた時は、本当に嬉しかった。

僕らの通っていた幼稚園には、年齢別の横割りクラスと異年齢のまじる縦割りクラスがあつて、その時々々の活動に合うクラス分けが適用されていた。

園庭で遊ぶ時間にはクラス関係なく遊べるし、園外にお散歩に行く時は年長組の子が年中・年少組の子たちを助けてあげられるようにという意図で、縦割りクラスで行動する。

そんな時には慎くんやスズカちゃんと一緒にいられて、友達を作るのが苦手だった僕にとっては、心の休まる大切な時間だった。

次の年には木葉ちゃんも入園して、四人揃って縦割りクラスで一緒になれた。

今でもよく転んだりぶつかったりして目に涙を浮かべていることの多い木葉ちゃんは、この頃はもつとドジで泣き虫で、……まあ、泣き虫だったのは僕も人のこと言えないけど。

とにかく『そんな木葉ちゃんの助けにならなきゃ、年長さんなんだから』と、当時の僕は、とても張り切っていた。

けど、その決意は空回りしてばかりだったと思う。

怪我をした木葉ちゃんのことを助けるのはいつも、歳の割にしっかりしている慎くん。

元氣のない木葉ちゃんを励ますのは、いつも先生を困らせるくらいはしやぎまわっている

スズカちゃん。

しかも、そんな二人に助けられてばかりのは、僕も同じだった。

そんな、ほろ苦い思い出だけ。今思い出しても、不思議とそこまで悪い気はしない。

だって、あの頃のことを思い出すと——ほら、こんな風に、暖かな気持ちになれる。

また、別の日。幼稚園のみんなで、森林公園へ遠足に行った時のことだ。

「ねーねー、くーちゃん。ここってどうやるの？」

「ぜんぜん、じょうずにできないよ……」

僕は、スズカちゃんや木葉ちゃんと一緒に、シロツメクサの花かんむりを作っていた。

「スズカちゃんのはねえ、ここをちゃんとおさえて、くるってすればできるはずだよ」

「わっ、ほんとだ！ くーちゃんすーい！」

「ふふ、ありがと。このはちゃんのも、じょうずにできる。この、はみだしてるところをこうやっていれてあげたら、もつときれいになるよ」

「ほんど？ ちゃんと、できる？」

「うん、できるよ。おしえたばかりなのに、こんなにすぐにできるようになるなんて、このはちゃんはすごいねえ」

「はいはい！ わたしも！ わたしもできるようになったよ！」

「スズカちゃんもすごいねえ。ふたりともすぐに、ぼくよりもじょうずになっちゃうかも」

そうやって教えていると、スツと頭上に影が落ちた。先に作り終わって頭に乗せていた花かんむりが、近づいてきた誰かに取り去られてしまう。

「おまえ、なにしてんだよ」

振り向いた先にあつた顔を見て、思わず身体を固く強張らせた。

それは、僕と同じ年長組の、僕にいつも意地悪をしてくる男の子だった。

「なにして、はなかんむりつくってるんだよ？ みてわかんないの？」

スズカちゃんが、ずいと身を乗り出して応える。止めようと思っただけ、身体も口も、思うように動かない。どうにかこうにか、木葉ちゃんを庇うように身体を横にずらすのが精一杯だった。

「それくらい、みりやわかるにきまつてんだろ！ おまえらこそ、わかんねえのかよ！ オトコのクセになんでオンナみたいなことしてんだっていったんだよ！」

スズカちゃんの言い草に怒ったその子は、僕の作った花かんむりを地面に叩きつけて、

泥だらけの靴で踏みつけた。

「ちよつと、なにをするのさ！ くーちゃんががんばってつくつたのにー！」

「うるせー、だまつてる！ オトコらしくないこいつがわるいんだ！」

食ってかかったスズカちゃんの肩を、ドンと押して突き飛ばす。

僕は慌てて立ち上がってスズカちゃんに駆け寄ったけど、男の子は、そんな僕たちをバカにするような視線を向けてきながら、何度も何度も、執拗に花かんむりを踏み続ける。どうしよう。スズカちゃんが震えてる。木

葉ちゃんが泣いて、怖がってる。木

年上の僕が、どうにかしなきゃいけないのに。でも、どうすればいいかわからない。

涙に滲む視界で、相手を睨むことすらできずに俯くばかりで、どんどん時間が過ぎていく。

花かんむりは、もう元の形も思い出せないくらいに、ぼろぼろのぐちゃぐちゃになってる。

「おい」

そんな男の子の腕を、誰かが掴んだ。僕らから引き離そうとするように、力を込める。

「おまえ、なにしてんだよ」

奇しくも、先程の彼と同じ言葉を投げかけ、——慎くんが、そこに立っていた。

「なんだよ、おまえ」

「きいてるのはオレだ。なんで、このはとくぬぎがないてるんだ。おまえがなかせたのか」

「し、しらねーよ！ こいつがかってにないんだ！ オトコのくせにオンナにまじってこんなモンつくってるから、そんなのへんだけってやってただけだよ！」

その言葉に、慎くんが彼の足元を見る。泥にまみれて潰れている物に目を留めて、

「くぬぎが、これをつくってることの、どこがへんなんだ」

そう、訊いた。年長の男の子は、そんなこともわからないのか、というような小バカにした表情で答える。

「さっきいつてやっただろーが。こんなの、オトコがつくるモンじゃねえんだよ」

「それがりゆうになるって、ほんきでおもってんのかよ。……そんなくだらないりゆうでくぬぎをいじめてるおまえのほう、よっぽどへんだよ！」

言い返す慎くんは、年長相手だろうと決して臆さない。

むしろ、あまりの気迫に、相手の方が気圧されていた。

何か言い返そうとして、けれども、何も思いつかなかつたのだろう。逃げようとする彼

の手首を、がっちりと掴んだまま離さずに、
慎くんが畳みかける。

「……あやまれよ」

「はあ？ なにをだよ」

「ひとのモンこわして、こわがらせて、なか
せただろ。それで、あやまらないつもりかよ」

「う、うっせーな！ カンケーねえよ！」

けれど、年長さんの力には慎くんでも敵わ
なかったようで、腕を振り解かれてしまった。
逃げ去っていく背中を少しの間だけ見つめて
いた慎くんが、僕たちの方に向き直る。

「だいじょうぶか？ ……ケガ、してないか」

慎くんは、僕と木葉ちゃんを交互に見る。

けど、突き飛ばされたのはスズカちゃんだ。

僕が「だいじょうぶ？」と訊くと、スズカち
ゃんはこっくりと頷く。

「ケガは、ないみたい」

「そっか。……けど、これ、くぬぎが、つく
ったんだよな」

慎くんが、ぐちゃぐちゃにされた花かんむ
りを拾い上げて、哀しそうに目を伏せる。

大丈夫だよ。また、作り直せばいいんだか
ら。彼を安心させようとして、そう言おうと
したけど、言えなかった。

それが、本心からの言葉じゃないからだ。
花かんむりと一緒に、僕の心も、ぼろぼろ

のぐちゃぐちゃになってしまった。

また、涙が滲みそうになる。木葉ちゃんと
スズカちゃんが、僕のことを心配そうに見つ
めていた。

ダメだ、すっかりしないと。また、二人が
不安な思いを味わうことになってしまう。そ
う思うのに、必死に歯を食い縛っているのに、
溢れ出る涙は止まってくれない。

涙でぼやけた視界の中で、慎くんが、僕の
目の前に屈み込むのが見えた。

手の甲で涙を拭って、その姿に注視する。

たどたどしい手つきでシロツメクサの花を摘
む、慎くんの姿が目映った。

慣れない様子で眉を寄せながら、ゆっくり
と、けれども着実に、茎と茎を編み込んでい
く。突然の行動に、木葉ちゃんたちも戸惑っ
ていた。

やがて、すっかり涙も引いた頃。

できあがった、少し不格好な花かんむりを
——慎くんが両手で差し出して、僕の頭に被
せてくれた。

「……ごめん。ひさしぶりだから、くぬぎみ
たいにうまくできなかつたけど」

ばつが悪そうに目を伏せて顔を逸らすその
姿は、とてもキラキラとして輝いて見えて。
つい、その横顔に目を奪われてしまう。

慎くんは、そんな僕の視線に気づいてか、
唇を尖らせて呟いた。

「なんだよ。……やっぱ、そんなカツコわる
いのじゃダメか」

「ううん、すっごくうれしい！ ありがと、
シンくん！」

自然と、笑みが浮かぶ。両手を包み込むよ
うに握って笑いかけると、慎くんは恥ずかし
そうにしながらも僕の方に向き直って、ホッ
としたように、微かな笑みを返してくれた。

「そうだ、シンくんにもつくってあげるね」

「えっ？ オ、オレはいいよ、くぬぎとちが
って、にあわないし」

「そんなことないって。いっしょにせんせい
のとこいって、しゃしんとつてもらおうよ」

「……まあ、くぬぎがそうしたいなら」

こんな風に、僕のためのヒーローになって
くれる瞬間の慎くんは、僕の目には誰よりも
カツコよく映って。

きつと、この頃から少しずつ、彼に対する
「好き」が、胸の奥底に降り積もっていつて。
あれから十年以上が経った今日まで。そし
てきつと明日からも、ずっと僕は。

この世界の誰よりも素敵な男の子で、僕の
幼馴染——緑川慎くんは、恋をしている。

まどろみの中で、懐かしい夢を見ていた気がした。

目を醒ますのが億劫で身じろぎすると、指先が何かに触れる。

少し厚めで、表面がつるつるした紙、だと思っ。うつつらと目をひらいて、目の前に掲げて視界に入れて、思わず「ああ」と力の入らない笑みを零した。

「懐かしいなあ」

まだ幼い僕と慎くんが、頭に花かんむりを被って写っている、ツーショット写真。

慎くんが被っているのは形が綺麗に整っているけど、僕が被っているのは少し不格好だ。写真を眺める自分が、ベッドの上で仰向けに寝転んでいることに気づいて。少しずつ、頭の中が整理されていく。

そうだ、勉強に気が乗らなくて部屋の整理をしていたら、この写真を見つけたんだ。

懐かしくなって眺めている内に、寝入ってしまったのだろう。

ゆっくりと体を起こして、枕元に置いていたアルバムに写真を押し戻す。

今よりも、もっと小さな木葉ちゃん。どの写真でも動き回りすぎて、ブレまくっているスズカちゃん。カメラから視線を逸らして写った写真はかなりの慎くん。

幼稚園から小学一、二年生頃の写真を集めたアルバム。これを眺めながら眠ったから、あんな夢を見たのだろう。

あの頃の中でも一番煌びやかで、鮮烈に脳裏に焼きついた思い出だ。

どの写真でも決してカメラに視線を合わせない慎くんが、僕と二人で写ったこの写真だけは、躊躇いがちな様子ながらも、しっかりとカメラを見てくれている。

ただ、それだけを何度も確かめるように、写真を繰り返し眺めて。その度に慎くんの優しさを——束の間のことでも、僕のためになろうとしてくれた彼の思いやりを実感して。どうしようもなく、面映ゆい気持ちになる。

そういえば、——もうずっと、慎くんと一緒に撮ってないな、写真。

ベッドから出て、アルバムを本棚の隅に差し込みながら、ふとそんなことを思った。

部屋の中が薄暗いことに気づき、窓の外に広がる夕焼けに染まり始めた空をカーテンで遮る。

電灯を点けて机の上を見ると、ひらきっぱなしの化学のノートが目に入った。それと、六時半を示す卓上時計。

明日は一学期の期末テスト最終日。本当なら、片づけをしている場合でも、うたた寝し

ている場合でもないのだけれど。とりあえず、晩ごはんの時間までに少し勉強の続きをしようか。

そう思って机に向かうけど、なんだか頭がぼんやりして、集中できない。

まずは、目を醒ますのが先決かな。そう思い、クローゼットを開けた。

フードの裏地だけが薄いピンクに彩られた白い七分袖パーカーを、半袖Tシャツの上から羽織る。オフホワイトのキャップを被り、スマホと小銭入れをポケットに突っ込んだ。

二階の手前にある自室を出て階段を降りると、リビングの扉を開けて、覗き込むように顔だけを出す。

テレビの音が入って、ダイニングテーブルに肘を突いて画面に見入るお父さんの姿が目に入った。

「もう帰ってんだ、お父さん」

「ああ、くぬぎ。こんな時間に出かけるのか？」
テレビ画面から目を離して、こちらの恰好をジッと見てくる。

少しばかり身体に緊張が走るのを感じながら、曖昧な笑みを貼りつけて応えた。

「ちよっと、散歩に行ってくるだけだよ。すぐに戻るから」
キッチンの方から、物音にまじって「もう

すぐ暗くなるだろうし、気をつけてねー」と、お母さんの声が呼びかけてくる。うん、と返事をしようと口を開きかけたけど、

「そんなに心配しなくていいだろう。もう高校生だし、男なんだから」

キッチンを振り返ったお父さんの言葉に、口の端が引き攣れたように動かせなくなった。

そっと閉めた扉の向こうから、お父さんの「おおっ」という歓声が聞こえてくる。多分、スポーツ中継を見ているのだろう。さつき言ったことは、日常のなんでもない会話の一つとして、すぐに忘れてしまうんだ。

扉越し、微かに聞こえるテレビの音から意識を逸らし、玄関に座り込む。

スニーカーを履くと、誰に聞かせるわけでもない小声で「いつてきます」と言っ、玄関扉を開けた。

家の前を数歩出たところで、隣の家から出てくる長身の人影に気づく。

向こうもこちらに気づいたようで、長い睫毛に縁取られた切れ長の瞳が、ぱちぱちと素早い瞬きをした。

「慎くん、どうしたの？」

「ちよつと気晴らしに、散歩でも行こうかと思っつてな。くぬぎは？」

さつきまでの息が詰まるような気持ちだが、

これだけのことで、一気に暖かく溶けていく。なんて嬉しい偶然だろう。思わず頬を緩ませながら答えた。

「僕もそんな感じ。一緒に歩いていい？」

慎くんは何も言わない。けど、その代わりに、しっかりと頷いてくれた。

「だからね。あの頃は僕も泣き虫だったし、年長さんなのに頼りなかっただろうなって。

いつも慎くんに助けられてばかりだったし「……泣き虫なのは今も変わってない気がするけどな」

「そ、そんなことないよ。僕だって、ちよつとは成長してるんだから」

「そりや、幼稚園の頃と比べて成長してなかったら大問題だろう」

せつかくだからと思っ、並んで歩きながらあの頃の思い出話をしてみたけど。

慎くんの切り返しがいちいち意地悪で、ついつい話が逸れてしまう。

「なんでそういうこと言っっちゃうかなあ。あーあ、昔はもつと可愛げがあったのになあ」

「悪かったな。可愛げのないひねくれものに育っちゃまって」

別にいいけど。そういうとこだっって慎くん一つの側面で、嫌いなわけじゃないし。

けど、どうしても考えてしまう。

あの頃は慎くんにとっ、そんな風に受け流す程度のことではしかないのかな。

大事な思い出と思ってるのは、やっぱり、僕だけなのかな。

ダメだな。せつかく一緒に歩いているのに、こんなネガティブ思考に陥っちゃうなんて。

「……まあ、でもさ」

「へっ？ な、なに？」

気を取り直そうとした直後に切り出されて、咄嗟に出した声が裏返る。

「……ごめん、ちよつと考え事してて。それで、なに？」

「いや、そんな大したことじゃないんだけど」

出鼻を挫いてしまったかもしれない。視線を宙に彷徨わせて逡巡する様子をみせていた慎くんが、観念したように目を伏せる。

「……お前が思ってるより、俺はお前に助けられてるよ。小さい頃から、ずっと」

慎くんの顔を見上げる。夕日に朱く照らされた横顔は、こちらに目を合わさない。

「俺は、相手の気持ちを考えたり、細かいこととにまで気を回したりつてのが、どうしても苦手だからさ。そういうことができるくぬぎがいてくれるのは、なんていうか、……結構、助かってるんだよ」

色素の薄い唇が、淡々と、微かに動き続ける。

「この間の勉強会だって、くぬぎが来れてたら、もっと捗っただろうし」

「ごめんね、行けなくて」

「責めてるわけじゃない。それくらい、いつも力になってもらってるってことだ」

慎くんが僕のことを、そんな風に思ってくれていたなんて。今まで全然気づかなかった。だって、慎くんは素直じゃなくて、不器用で、なかなか本心を打ち明けてくれないから。

「そっか、そうなんだ。でも珍しいね、慎くんがそんな風に褒めてくれるなんて」

「なんだか照れくさくて、僕の方まで素直じゃなくなってしまう。」

慎くんは耳に掛かった髪を落ち着きなく指先で弄りながら、僕の方をチラとだけ見て、また目を逸らす。

「……お前が、自分のこと頼らないつつって落ち込んでるから。気にしてんのかなって」

「どうやら、態度に出していたらしい。」

慎くんは、彼自身が思っているよりも、人の気持ちに寄り添うことができていると思う。

だって、本心を話すのに慣れていないはずの彼が、落ち込んでいる僕のために本心を打ち明けてくれたのだから。

まあ、僕が落ち込んでいた理由に関しては見当違いだから、やっぱりズレてるけど。

それでも、不器用なりに気を遣って、僕のことを考えてくれたのが嬉しかった。

そういう優しいところ、やっぱり好きだなあ。

思つて見上げると、慎くんもこちらを見下ろして、眉を顰めた。

「……なにニヤニヤしてんだよ」

「んーん、なんでもない」

「そうかよ。……あ、そういえば」

「なに？」

「木葉から聞いたぞ。俺が公園にいる時、こつそり撮ってたんだろ、写真」

ギクツと、肩が強張る。慎くんが公園のベンチで野良猫に囲まれてるのを見かけて、つい撮ってしまった写真。

今も、スマホのストレージとクラウド、両方に保存してある。

「えっと、その。……慎くんが、あんなに柔らかない表情してるの、珍しいなって思つて、悪いかなどは思つただけど、なんていうか、その」

やっぱり、よくなかったかな。親しき中にも礼儀ありつて言葉もあるし、いくら幼馴染でも、隠し撮りされてたなんて知つたら、や

っぱり気分よくないよね。

言い訳じみた言葉しか思い浮かばなくて口を噤むと、後ろめたさだけが膨らんでいく。

「別にいいよ、そんな焦つて言い訳しなくても」

そんな僕に慎くんが掛けてくれたのは、思つてもみなかつた言葉だった。

いつの間にか俯けていた顔を、パツと上げる。慎くんの横顔は、まっすぐ前を見ていた。

「くぬぎなら、別にいい。からかうにしても、本当に嫌な部分までは踏み込んでこないし。

悪用することもないだろうし。……スズカに見せないでいてくれたら、それで」

「許して、くれるの？」

「許すもなにも、別に怒つてない。それに、猫の写真が増えたのは嬉しいからな」

慎くんがスマホの画面を見せてくる。件の写真が表示されていた。

「それ、どうしたの？」

「木葉に送つてもらつた。よく撮れてるな」
そう応える慎くんは、写真の中と同じ柔らかない表情をしていた。

思えば今日の彼は、なんだかいつもより饒舌だ。これも、僕を励ますためだろうか。

それとも、二人で並んで夕焼け空の下を歩いているという場の雰囲気のおかげだろうか。

ありえないことを期待しそうになってしま
い、その気持ちを振り払おうと口をひらく。

「慎くんって結構、僕のこと信頼してくれて
るんだね」

「……まあ、意外と油断ならない奴だとは思
ったけどな」

「それは、そうかも。じゃあ、これからは慎
くんの信頼を損なわないようにしなきゃ」

「そうじゃなきゃ、胸に秘め続けたこの想い
が報われることはなくなってしまう。」

「元から、ほとんど望みのない恋だけれど。
少しだけでも存在しているはずの希望を、自
分のせいで失うようなことは、したくない。」

「ねえ、一緒に写ってる猫ちゃんの中に、慎
くんのお気に入りの子っているの？」

「この、細身の黒猫。蒼い瞳が綺麗で、最初
に会った時には動けなくなっただよな」

「ふうん、一目惚れ？ そっかあ、慎くんは
こういう子が好きなんだ」

「……妙な言い方すんなよ」

「いつかまた、二人で一緒に写真を撮れたら
いいな。」

「その時が来たら、——この気持ちも、きつ
と伝えられる。そんな気がした。」

中学生と高校生

今から二年前。まだ、私が中学一年生だった頃。

放課後、図書室の扉を開けると、いつも嬌やかな微笑みで迎えてくれる人がいました。

「いらつしやい、木葉ちゃん」

いつも学ランのポケットに文庫本を入れていて、昼休みも放課後も、貸出カウンターに座っている図書委員長。男の子だけど、面倒見のいいお姉ちゃんみたいな子。

それが、くーちゃん。——私の二つ年上の幼馴染、浜池くぬぎちゃん。

「木葉ちゃん、いつも図書室に来てるけど、大丈夫なの？」

ある秋の日、いつものように貸出カウンターに並んで座っていると、ふとした様子で、くーちゃんが訊いてきました。

その日、多く出された数学の宿題に頭を悩ませていた私は、問題集から顔を上げて、くーちゃんの顔を見上げます。

「ここだと、家にいるより集中して勉強できるんです。だから大丈夫ですよ」

「それもだけど、そうじゃなくて。……昼休みとか放課後って、クラスの友達と話したり遊んだりとか、あるんじゃないかなって。もし、僕に気を遣ってここに来てくれるのなら、気にしないでいいんだよ」

八の字に下がった眉毛のせいで普段から気弱に見える顔が、普段よりもずっと力なく、微笑笑を浮かべていました。

そんなくーちゃんの方こそ私に気を遣っているように見えて、なんだか、つまらない気分になって、つい不貞腐れたような声を上げてしまいます。

「別に、気を遣ってるとかじゃないです」

こんなこと言ったら、困らせちゃうかな。思っ、ちよつとだけ明るい声を作ります。

「学校でも一緒にいられるのが嬉しいから、ここにきてるんですよ」

「そう、なの？」

「そうですよ。だって、幼稚園も、小学校も中学校も。みんな先に行っちゃうから、私はいつも置いてけぼりで、心細くて」

取り繕おうとしても上手くいかなくて、つい心の内を剥き出しに晒してしまっ、

くーちゃんの顔を見ていられなくて、顔を俯けてしまいました。

「……その、ごめんなさい。こんな、面倒く

さいこと言っちゃって」

「だ、大丈夫だよ。なんていうか、その……僕も、同じだから」

顔を上げると、どこか遠くを見るように目を細めるくーちゃんの横顔が目に入りました。

「僕もね、心細かったんだ。いつも、新しい場所に一人で飛び込まなきゃいけないから」

「そう、なんですか？」

思わず訊くと、くーちゃんは私に視線を向けて、曖昧な笑みを浮かべます。

「うん。でも、今は平気なんだ。木葉ちゃんと一緒にいられるし、それに——」

わずかに逸れた視線の先には、廊下に続く扉。釣られて目を向けると、廊下の方から、パタパタパタ……と、忙しない足音が聞こえてきます。段々と足音は近くなって、

「やつほく二人とも！ 今朝ぶりだね！」

勢いよく扉を引いて、元気な声を上げて、一人の女の子が姿を現しました。

橘スズカちゃん。私の一つ年上、くーちゃんから見たら一つ年下の幼馴染です。

いつも勝気な笑みを浮かべていて、元気がいっぱい、放課後には、図書室の隣にある美術室で絵を描いている、美術部員の女の子。

「——たまに、スズカちゃんも部活をサボってここに来るし」

くーちゃんがにこやかに言っ、私も「ふふつ、そうですね」と顔を見合ませます。スズカちゃんは、頭の上の猫ちゃんみたいなお耳をびよこびよこさせながら大きく瞬きました。

「なにに？ わたしの噂でもしてた？」

小さい頃に『猫の世界』に迷い込んで冒険を繰り広げたという彼女の耳は、猫ちゃんのように大きな三角形をしていて、産毛に覆われていて、感情豊かに動きます。

あの耳が見えているのは、どうやらスズカちゃん本人と私、くーちゃんだけみたいです。他の誰かがスズカちゃんのお耳を不思議がっているところは見たことがないし、美術部の後輩が描いたというスズカちゃんのスケッチを見せてもらった時も、普通の人間のお耳が描かれていました。

「スズカちゃん、今日は部活行かなくていいんですか？」

「んー、なーんか気分が乗らないんだよねー」スズカちゃんは手近な椅子を引き寄せてきて、私とくーちゃんの間座ります。

本当は、図書委員以外は貸出カウンターに入っちゃいけないって決まりがあるけど、私もくーちゃんも答めるつもりはありません。「スズカちゃんの心は、秋の空みたいだね」

ふとした様子で呟いたくーちゃんに、スズカちゃんが「何それ？」と首を傾げます。お耳がピンと立っていて、くーちゃんの言葉に興味を引かれているのがわかりました。

「秋の空は天気が変わりやすいから、それに例えて、心が変わりやすいことを表すんだよ」

「スズカちゃん、猫ちゃんみたいで気まぐれですもんねえ」

「えー、確かに猫っぽいとか気まぐれとかはよく言われるけど……」

口を失らせるスズカちゃん。おそるおそる「嫌でしたか？」と顔を覗き込むと、何やら小難しい表情で考え込んでいます。

「嫌ってわけじゃないけど、なんか釈然としないっていうかさ。……うーん、そうだね。それじゃあ人間の二人に、いいことを教えてあげよう！」

パツと立ち上がったスズカちゃんは得意げに胸を張って、一息に言い切りました。

「猫は気まぐれ、なんてよく言われるけどね。猫の中では考えの筋道が通ってるんだよ。その考えが人間には理解できないから、結果的に猫の行動が気まぐれに見えるだけ！」

思わず、ぱちくりと目を瞬かせてその顔を見上げます。

スズカちゃんもまた、不思議そうな顔で私

に視線を返しました。

「どしたの、木葉ちゃん。変な顔しちゃって」

「あ、えつと。猫っぽいって言われるのが嫌なわけじゃないんだなって」

「ん？ あー、そりゃそーじゃん。だってわたし野良猫だもん！」

応えるスズカちゃんは、どこか誇らしげです。

町に住む野良猫たちから同類と見做されているスズカちゃんは、縄張り争いだといってボス猫さんと睨み合っていたり、集会に行くといつて夜にこっそり家を抜け出したりしています。

野良猫としての誇りを胸に抱くその姿に、くーちゃんが納得げに頷きました。

「そっか、だから人間の尺度で測られるのは微妙な感じなんだ」

「その通り！……まあ、別にそこまで嫌ってわけじゃないんだけどね。野良猫であると同時に人間であることも事実だし」

一緒にいて居心地のいいくーちゃんと、話

すだけで気持ちがあがきになるスズカちゃん

たまたまに、部活が早めに終わった慎くん――

スズカちゃんと同じ年の幼馴染が顔を出してくれたり、美術部の人

がスズカちゃんを連れ

戻しに来たり。

あの頃の放課後の図書室には、いつも暖かな時間が流れていたような気がします。

扉の前に立って、手を掛けようとして、思わずその手を止めてしまいました。

この向こうには、誰もいません。

今の私は中学三年生で、年上の幼馴染はみんな別々の高校に進学しています。

司書の先生も図書室を空けていることが多いから、放課後に訪れても、私一人で過ごすことがほとんどです。

扉を引くと、やっぱり痛いくらいの静けさが満ちています。図書室なんだから、本当は静かなのが当たり前だけど、つい、あの頃と今とを比べて、入る気を失くしてしまいます。

扉を閉じながら、溜息が零れました。中に入ることはないのに、放課後になると足が向いてしまうのは、悪い癖です。

特に近頃、秋の色が深まってきて肌寒くなってからは、足を運ぶ頻度が高くなっている気がします。

昇降口に向かおうと階段を降りて、一階の廊下を歩いていると、

「ああ、高崎さん」

ちょうど職員室から出てきたところの、若い男性の先生に呼び止められました。いつも

生徒の顔を窺うような態度でいる、私のクラスの担任です。

「あ、先生」

さようなら、と挨拶をしようとする、「ちよどよよかかった」と遮られます。

「進路調査票のことなんだけどね。うちのクラスで提出してないの、あとは高崎さんだけなんだけど、いつくらいに出せそうかな」

「あ、えっと……すみません、今週中には、決められると思うんですけど」

「いや、謝ることはないんだけどね。もう三者面談も迫ってるし、提出するだけじゃくて保護者の方とも話し合っておいてほしいんだけど、大丈夫かな」

「あ、はい。大丈夫だと思います」

先生はまだ何か言いたげな様子だったけど、それ以上は言わずに通り過ぎていきました。

自分が息を止めていたことに気づいて、音を立てないように息を吸って、吐きます。

再び踏み出した足が、なんだかいつもより重く感じられて、

「……はあ」

今度は、音を立てて溜息をついてしまいました。

「あれ、木葉ちゃん？」

顔を俯けて歩いていた帰り道。不意に、聞き慣れた声で名前を呼ばれました。

顔を上げて振り向くと、近くの県立高校のブレザー制服を着た男の子が、ゆったりとした足取りで歩いてきています。

「くーちゃん。今日は早いですね」

「うん、今日は部活も委員会もなかったから隣に並んだくーちゃんの姿を見上げて、思わず「あ」と、小さな声を上げました。

「どうしたの？」と笑いかけてくれるその顔をじつと見上げて、私も笑いかけます。

「その髪型、いつもと違って新鮮ですね」

肩の少し上でふわふわと揺れる、緩めの三つ編みハーフアップ。普段は後頭部で一本に結わせるか下ろしているのが、印象が大きく変わって見えます。

「ああ、これ？ ちよっと、僕には可愛すぎるかなとも思っただけど」

「そんなことないです！ くーちゃんの雰囲気合ってる素敵だと思います！」

自信を持ってほしくて、つい声に力が入ってしまいました。私を見下ろすくーちゃんのキョトンとした表情が、段々と、はにかんだ微笑みに塗り替わります。

「そ、そうかな？ ありがと」

ほんのりと紅く染まったその顔を眺めている

ると、胸の奥からほかほかと暖かな気持ち
湧き上がってきて、秋風の肌寒さも、小さな
悩みも、忘れられそうな気がしてきました。

「実はこれ、自分でやったわけじゃないんだ
よね」

「そうなんですか？」

「うん。放課後にクラスの友達と話してる時
ちよつと髪いじらせてって頼まれちゃって。
せつかくだから、帰る間だけでもこのままに
しとこうかなって」

応えるくーちゃんの横顔は、しっかりと前
を向いていて、嬉しさと、ちよつとの自信が
滲み出ているように見えて。

「なんだか、私の知らないくーちゃんを見て
いるようでした。」

胸に満ちかけていた仄かな暖かみを冷たい
風が攫っていつてしまったようで、思わず足
を止めてしまいます。

数歩先で気づいたくーちゃんが戻ってきて、
心配そうに顔を覗き込んできました。

「木葉ちゃん、大丈夫？ さつきも、ちよつ
と元気なさそうだったけど」

「な、なんでもないですよ」

慌てて誤魔化したけど、くーちゃんは首を
捻って、まだ心配そうな顔をしています。

「それよりも、えつと……そうだ！ せつか

くだから慎くんに見せましようよ、その髪型
「へっ？ いや、でも、まだ帰ってないんじ
やないかな」

くーちゃんはわかりやすく顔を真っ赤にし
て、落ち着きなく視線を彷徨わせ始めました。
「こによこによと何か言っているのには構わず、
スマホのカメラを向けて力説します。」

「写真を送ればいいですよ！ いつもと違
う姿を見せてドキッとさせちゃいましょう！」
「そんな、慎くんは僕のことなんて、そうい
う風に見れないだろうし……」

「やる前から諦めちゃダメですよ！ ほら、
撮りますよ！ とびつきの笑顔で！」

ちよつと強引になったけど話を逸らすこと
はできたし、慎くんのことになると途端にし
どろもどろになるのは昔から変わってなくて、
ちよつとだけ安心します。

（こんなことで安心するなんて……なんか
私、嫌な子みたい）

苦い気持ちを顔に出さないよう呑み込んで、
くーちゃんを撮ることに意識を注ぎました。

家に帰って、自分の部屋で勉強して。時々、
進路調査票と睨めっこしては溜息をついて。

ふと、思い出した出来事がありました。
二年前の夏休み明け、体育祭の練習があっ

た時期の、ある日のこと。

放課後、いつものように図書室に顔を出す
と、明らかに気落ちした様子のくーちゃんが
貸出カウンターに座っていました。

私が「何かあったんですか」と訊いても、
「なんでもないよ」と誤魔化すばかり。

でも、ぼーっと窓の外を眺めていて、時々
溜息を呑み込むように息を止める様子は、と
ても「なんでもない」ように見えなくて。

しつこいかなと思いつつも、何度も何度
も聞き出そうとしていると、やがて、観念し
たように話してくれました。

その日は、全学年参加の男女別競技の練習
があつて、女子は棒倒し、男子は騎馬戦を練
習していました。

くーちゃんは男子の中では小柄な方だから、
騎手に選ばれたそうです。

競技中に体操服に手が引つかかって怪我を
してはいけないからという理由で、騎手は上
半身裸で参加することになっていました。

それがすごく嫌だったから、一、二年生の
頃は避けてきたけど、三年生の時に騎馬を組
むことになった人たちは押しが強く、断り
切れなかったみたいです。

でも、やつぱり途中で耐え切れなくなって、
気分が悪くなつて。

くーちゃんが保健室に行こうとした、その去り際。

『騎馬組ませるにはヒョロくて不安だし、男の癖に裸になるのは嫌だつて言うから騎手もさせられないし。とんだハズレくじ引かされたな』

騎馬役の一人が聞こえよがしにぼやいたのが、背中聞こえたのだと、くーちゃんは泣きそうな微苦笑を浮かべて話を締めくくりました。

聞き終えた私の心は、そんなの酷い、って気持ちでいっぱい、

「そんなの、酷いです！」

その気持ちをそのまま言葉に出して、つい、声を荒げてしまいました。

「肌を見せるのが嫌だつて思うことを、『男の癖に』なんて否定していいはずなんです！くーちゃんはハズレくじなんかじゃありません！むしろ、そんな強引な人が相手でも、嫌なことは嫌だつて言えて、すごいですよ！」くーちゃんは悪くないつて伝えたい。元気を出してほしい。

その一心で言葉を連ねていたら、当のくーちゃんに「ありがと、もう大丈夫だから」と、困り顔でなだめられてしまいました。

空回りしたのが恥ずかしくて肩を縮こまら

せる私に、くーちゃんは少し晴れやかな表情で、「ちょっと、聞いてほしいことがあるんだけど、いい？」と訊きます。

私が顔を上げて頷くと、緊張を隠すように微笑みを浮かべました。

「今まで、誰にも話してこなかったんだけど——」

——あの時、くーちゃんは私のことを信頼して、秘密を打ち明けてくれました。

それなのに、今の私ときたら。その秘密を話してもらえたことに優越感を抱いていたと自覚して、どうしようもない自己嫌悪に陥っています。

目の前にある進路調査票は、そんな私の苦い気持ちを増長させてきます。

何度も書き直そうとして、けれど、消しゴムを持つ度に手が止まって、結局のところ書き直せなくて。

それを繰り返す内に時間は過ぎていき、やがて、とつぷりと日も暮れた頃。

スマホに、一通のメッセージが届きました。

『今、そつち行ってもいい？』
丸っこい絵柄にデフォルメされたリスのアイコン。くーちゃんからです。

今の気持ちのままで、くーちゃんと話せる

かどうか。迷った末に、白いウサギさんが両耳で丸を作つて『OK！』と言っているイラストのスタンプで返信します。

少しの間が開いて、控えめな足音が扉の向こうから近づいてきました。

扉がノックされて、「はい」と返事をする

と、これまた控えめに扉がひらきます。姿を現したくーちゃんは、厚手の白いパーカーと黒のスウェットパンツというラフな恰好に着替えていました。髪も解いて下ろしています。

「ごめんね、急に」

「大丈夫ですよ。そうだ、さっきの写真、慎くんに送りましたか？」

食い気味に尋ねると、後ろ手に扉を閉めていたくーちゃんは、目を泳がせて俯きました。帰り道で撮った写真は、私からくーちゃんに送っています。

慎くんには、くーちゃんから送るようにと言つてありました。私が慎くんに見せるのではなく、くーちゃんが自分でアピールすることに意味があるのです。

「やっぱ、急にあんな写真送つても、慎くんを困らせるだけなんじゃないかな」

「そんなことないと思いますけど……」

「と、とにかく、僕には僕の。ペースがあるか

ら。できれば、そっとしておいてほしいな」
そう言われてしまうと強くは出られなくて、口を嚙みます。私の沈黙をどう受け取ったのか、くーちゃんは少し早口になって続けました。

「応援してくれるのはすごく嬉しいし、心強
いと思ってるよ。ただ、僕が臆病なだけって
いうか、……下手に踏み出したら、今までみ
たいにただの幼馴染じゃいられなくなって、
一緒にいられなくなっちゃうんじゃないかと
か、そういう風に考えちゃって」

「い、いえ！ 私もちよっと、急かしすぎち
やったかもしれないし、」
気を遣わせてしまった心苦しさから、応え
る私も早口になってしまいます。

「それに、関係が変わっていくのが怖いって
気持ちは……ちよっと、わかります」
自分でも意外なくらい、続ける声が沈んで
いました。

くーちゃんにも、様子が変わったことは伝
わってしまったのでしょうか。心配そうな顔で、
私の顔を覗き込みます。

「もしかして今日、そのことで悩んでた？」
思わず息を吞んで、くーちゃんの目をまっ
すぐに見つめました。

どうして、と口を動かすと、喉の奥に掠れ

た空気が通るのを感じます。尋ねる言葉が、
ちゃんと声に出ているかどうかは、わかりま
せん。

けれど、くーちゃんはそれだけで私の気持
ちを読み取ってくれたようでした。

「帰り道では訊いてほしくなさそうだったか
ら訊かなかったけど、やっぱり様子が違うと
気になっちゃって。話してほしいなって思っ
てたんだ」

棒立ちになつて俯く私を、くーちゃんはベ
ッドの縁に腰掛けて手招きします。

「話しにくいことだったら、無理に話さなく
ても大丈夫だから。関係ないところでいいし、
何か話そうよ。そしたら、少しは気が紛れる
でしょ？」

その隣に座ろうとして、ふと別の方向に足
を向けます。机の上から一枚の紙切れを取っ
てきて、今度こそ、拳二つ分ほど開けた隣に
腰掛けました。

「もうすぐ学校で、三者面談があるんです。
それまでに、これを出さなきゃいけない」
「これって、進路調査票？ そっか、もうそ
んな時期なんだ」

話の取っ掛かりにしたはいけれど、そこに
書かれたことを見せるのには抵抗があつて、
思わず、隠すように紙を折り曲げます。

「クラスの中で提出してないのは、もう私だ
けみたいで。全く決まってるわけじゃない
けど、本当にこれでいいのかなんて気持ち
あつて、提出できないでいるんです」

くーちゃんはキョトンとした様子で、私の
方を窺っています。

やっぱり、こんなに濁してたら伝わらない
かな。思った私は意を決して、紙の折り目を
ひらいて見せました。

埋まっているのは第一志望の欄だけです。
それを目にしたくーちゃんは、ばちばちと、
ちよっと大袈裟な草で瞬きをします。

「木葉ちゃん、東高志望なんだ」

東高校は、この家から徒歩十五分ほどの場
所に位置する県立校で、くーちゃんはこの
二年生です。

「もちろん、私立の併願も視野に入れてた方
がいいんだろうけど、第一志望が決まってる
なら、とりあえずいいんじゃない？ 東高な
ら徒歩で通えるし、木葉ちゃんなら人並みに
頑張れば手が届くだろうし。先生も、木葉ち
ゃんのお父さんお母さんも、反対はしないと
思うよ」

そう言うくーちゃんは、気を遣うでもなく、
励ますでもなく、ごく自然な口振りでした。
私のことを信頼してくれているのが、存分に

伝わってきます。

「それは、きつとそうだと思うんですけど」

普段は心地よく感じるはずの信頼が、今はかりは棘が刺さったような微かな痛みとして感じられて、思わず目を伏せてしまいます。

「これでいいのかなって気持ちだが、どうしても拭えないんです。……だって、」

くーちゃんの顔を、見ていられませんでした。

「私が東高に生きたいって思う理由は、くーちゃんがいるからなんです」

沈黙が怖くなって、焦りが口を突き動かします。

「最近、思い出すんです。放課後に、図書室で、くーちゃんたちと過ごしてた時のこと。

近頃、くーちゃんがいつの間にか遠くに行っちゃったような気がして——」

そこまで言ってしまうから、口を嚙みました。

違う。こんなことを言いたかったわけじゃないのに。

こんなこと言っちゃって、くーちゃんを困らせちゃうだけなのに。

でも、口を突いて出た言葉は紛れもなく私の本音で、声を抑えると、代わりのように涙が滲んできました。

我慢しようとするほど止めどなく溢れてきて、終いには、ひっく、ひっく、と喉の奥から嗚咽が洩れてしまいます。

「こ、木葉ちゃん？ 大丈夫？ ……じゃ、ないよね」

声は戸惑っているのに、背中を撫でてくれる手の感触は氣遣わしくて、優しく、……そんなくーちゃんに甘えている自分の幼さを、突きつけられるようでした。

「ごめんね、気づけなくて」

やがて、私の涙が引いた頃、くーちゃんが、ぼつりと呟くような調子でそう言いました、

違います、くーちゃんが謝ることじゃなくて、ただ私が、面倒なことを言っちゃってるだけ。

慌てて返そうとした言葉は、あわあわと口が空回りするばかりで、出てきません。

私が声を出せないでいる内に、くーちゃんはチャームポイントの眉を八の字に下げて気弱そうな笑みを浮かべ、続けます。

「去年、高校に入ったばかりの時は、すっごく不安だったんだ。中学校に上がる時以上に、知らない人たちがかりの環境に飛び込むことになるから。僕のことを知ってる人がいない場所、ややこしい僕のことを受け入れてくれる人はいるのかなって、心細く思ってた」

俯き気味に話していたくーちゃんが、天井の電灯を見つめるように顔を上げます。

「でも、飛び込んでみたら、意外と大丈夫だった。むしろ、先生も同級生も部活の先輩も、周りのみんなと波長が合うみたいで、心地よかったです。それだけじゃなくて、友達もできた。

僕が、お化粧とか、ヘアアレンジとか、そういう女の子っぽいことに興味を持ってても、馬鹿にしたり冗談だと思っただけだったりしないで、話題を共有してくれる友達」

きつとそれは、喜ぶべきことのはずなのに、素直に喜べない私がいることを自覚して、どうしようもない後ろ暗さが胸を満ちします。

「すごく、嬉しかったんだ。生まれ持った男の身体で生きるのが苦しくて、女の子として生きたいって、——ずっと願ってたことが、ちよつとだけ叶った気がして」

くーちゃんが、そつと、私の顔を覗き込みます。

「でも、その嬉しさにばかり気が向いちゃって、木葉ちゃんが寂しい思いをしていることに気づけなかった」

「それは、くーちゃんのせいなんかじゃなくて、……私が、勝手に寂しくなってるだけで」

さつきは出なかった声で、ようやく出てきました。くーちゃんは柔らかに目を細めて、

ゆるりと首を横に振ります。

「木葉ちゃんなら、そう言うだろうなって思ってたけど、やっぱり僕は気づきたかったよ。木葉ちゃんは今受験生で、大変な時期なのはわかってたんだから。ちよつとしたことでも不安に思うことがあるなら、取り除いてあげたかった」

私は思わず目を瞬かせて、くーちゃんをまっすぐに見上げます。

「ごめんね、恩着せがましくて。でも、今さらだけど、一つだけ伝えさせて」

くーちゃんは、そんな私の目を、まっすぐに見つめ返してくれました。

「僕が変に気を張らずに、素の自分で高校生活を送れるのは、木葉ちゃんのおかげだよ」

「……へ？」

「僕が思い切って秘密を打ち明けた時、木葉ちゃんが受け止めてくれたから、次の一歩を踏み出す勇気が湧いたんだ」

思わぬ言葉に目を見ひらく私に、くーちゃんはホツとしたように表情を緩めて、

「だからね、実は、さっきのも嬉しかったんだよ」

首を傾げる私に、囁くような声で言いました。

「木葉ちゃんが、僕がいるから東高に行きた

いって思ってくれたこと。』この人は絶対に自分の味方になってくれる』って思える人が同じ場所にいるのって、やっぱり心強いから」

「……ああいう理由で進路を選ぶのって、いいんですかね」

「いいんじゃないかな。もちろん、同じ学校に行っただけからって以前と同じように過こせるわけじゃないけど、近くに味方がいるって思えるだけでも不安は減るだろうし。そういう理由で選んだ道が、また別の出会いに繋がったり、そこから意外な道が拓けたりするし」

また、天井の電灯のある方向に視線を向けたくーちゃん。

白く照らされた横顔も、褐色に透かされた瞳も、やっぱり、どこか遠くを見つめているように思えて、私の胸は、性懲りもなくキュウツと締めつけられてしまいます。

「なんか、一つだけって言ったのに、いくつも語っちゃったね」

けど、照れくさそうに頬をほんのりと染めて困り笑いを浮かべる表情は、やっぱり私の知っているくーちゃんです。

その顔を見て安心して自分のことも、嫌いにならないでいいのかな、と。

今なら、少しだけ自信を持って、そう思える気がしました。

エンターテイナーと固定ファン

「スズカちゃん、何を描いてるの？」

記憶の中、そう訊いてくる先生の顔は、にこやかに笑っている。当時、幼稚園児だったわたしは、その優しい笑顔に、全幅の信頼を置いていた。

大好きな先生に、満面の笑みで応える。

「あのね、ねこのせかいのまんなかにはねえ、おつきなタワーがたってるの！ せかいがピッチのときには、きよだいロボにヘンケイしてせかいをまもるんだよ！」

猫の世界に迷い込んだ時に見聞きし、体験してきたことを、そのまま描いた絵だった。らくがき帳を両手で掲げて、自慢げに絵を見せるわたしに、先生は「わあ」と声を上げる。

「スズカちゃんは想像力が豊かだねえ。将来は漫画家さんかなあ？」

「まんがかって、なあに？」

「漫画家っていうのはね、お話を考えて絵を描いて、みんなを楽しませるお仕事だよ」

わたしは無邪気に喜んで、「しゅらいはまんがかになる！」と、先生に約束した。

それから、わたしはますますお絵かきが好きになって、たくさんの絵を描いた。それと、

猫の世界での冒険譚を、幼馴染や、他の友達や、先生たちに、たくさんお話した。

けれど、小学生、中学生と大きくなるにつれて、わたしの絵を見てくれる人も、お話を聞いてくれる人も、段々と減っていった。

幼馴染で同級生の慎くんまで、「そんな作り話、何度も聞かせるなよ」と突き放した。

作り話じゃないのに。わたしが、本当に聞きして、体験してきたことなのに。

そんなモヤモヤを抱えながら過ごしていた今から二年前、中学二年生の頃。

わたしは、二つの重大なことに気づいた。幼稚園の頃に大好きだったあの先生も、わたしのお話を想像力の産物だと思っていた。

本当の話だと信じてくれたわけじゃなくて、お話を作るのが得意な子を褒めただけだった。

それと、もう一つ。それは、わたしのそれまでのアイデンティティに関わること。

わたしは、想像のお話を作っていたわけじゃない。本当のことを話していただけ。

だったら、わたしはお話を作れないんじゃないか。

漫画家になってみんなを楽しませることなんて、できないんじゃないか……。

長方形のコタツの短辺の方に座って、黙々

と、ノートにシャーペンを書かせる。

その横、長辺の方にも二人座っていた。わたしから見て近い方にくーちゃん、遠い方に木葉ちゃん。

二人は、赤ペンで答え合わせをした公立高校入試の過去問を覗き込んでいる。

今日は、わたしたち幼馴染の間で不定期に開催している勉強会だ。

普段は誰かの部屋に集まって勉強するけど、冬休みの今はそれぞれの自室だと寒さが厳しいから、わたしの家のリビングでコタツを囲んでの開催となった。慎くんは、冬休みだというのに生徒会だか何だかの用事があるらしく、今日は不在。

慎くんがいても口うるさいだけだから三人の方が気楽だ。まあ、くーちゃんは内心、残念がってるかもしれないけど。

「この、問2の計算、何度やっても合わないです」

「えっと、これはね……ああ、先にxとyに代入して計算するんだよ。他のところは順序通りにできてるから、ここだけ気をつければ大丈夫」

今日の目的は、主に木葉ちゃんの入試対策だ。冬休みが明ければすぐに私立受験、少し経てば公立受験の時期が訪れる。

木葉ちゃんの第一志望は県立の東高校で、くーちゃんは東高の在学生だ。

過去問の答え合わせをしながら、解けなかった問題を解き直して、わからない部分があればくーちゃんに質問する。そういう形式で進めると、予め二人で決めてきたらしい。木葉ちゃんは今日のために、事前に過去問を解いてきたそうだ。

熱心だなあ、とただただ感心してしまう。……っというか、わたしがここにいる意味があんまりない気がするんだけど。

「スズカちゃんは調子どう？」

そう思った矢先、くーちゃんの矛先が思いがけずこっちに向けた。急なことだったから、手元のノートをめくる暇もなかった。

ノートの紙面が、くーちゃんの目に留まる。前髪の隙間から覗く、八の字に下がった可愛らしい眉毛が、少しだけ吊り上がる。

「……なんで漫画描いてるの？」

「いや、だってなんかいまいち乗り気になれないっていうか。わたし、やることないし」

「そんなことないよ。スズカちゃん、二学期の期末試験の成績、よくなかったんでしょ」「うええっ!? なんてくーちゃんが知っているのさ!」

思わず大声を上げる。くーちゃんは木葉ち

やんの方を気にするように「しいー」と唇に人差し指を当てて、そのままひそひそ声で続けた。

「スズカちゃんのお母さん、心配してたんだよ。勉強もそうだけど、近頃、何に対してもやる気が出ないみたいだって」

やっぱり、お母さんがチクったんだな。一瞬、悪態をつきそうになったけど。

「……お母さん、心配してたの？」

「うん。……実は僕も、ちょっと思ってた。最近のスズカちゃん、なんだかいつももの元気がどうか、覇気がなくなってる」

お母さんだけじゃなくて、くーちゃんにも見透かされていたとは。ひよっと思いで、木葉ちゃんの様子を窺うと、目が合った。その眼つきは、心配そうに翳っている。

「そろそろ三時だし、ちょっと休憩にしよっか」

一瞬だけ壁掛け時計に視線を向けたくーちゃん、わたしと木葉ちゃんに微笑みかけて、そう提案した。午後一時半に集まったから、もう一時間半経ったことになる。

「キッチン、借りるね。緑茶でいい？」

勝手知ったる幼馴染の家といった感じで、くーちゃんが席を立つ。

わたしが「うん」と頷いた直後、木葉ちや

んが「あ、手伝いますよ」とくーちゃんのあとに続いた。

自分の家だというのに手持ち無沙汰になってしまった。普段なら気にしないで悠々と待つていられるのに、今日はなんだか落ち着かない。

「蜜柑あるから、取ってくるね」

二人の返事を待たずに言い残して、玄関に置いてある蜜柑を取りにリビングを出た。

くーちゃんが淹れてくれた熱いお茶をふーふーと冷ましなが、ふと、考える。

わたしの元気がない理由を、二人は訊いてこない。

きつと二人とも、わたしが話し始めたら耳を傾けてくれるのだろうけど、いまいち、話す気になれなかった。

そろそろかな、と思ってお茶を啜る。まだ熱くて、思わず「あちっ」と声が出た。

「大丈夫？」

蜜柑を剥いていた手を止めて、くーちゃんが訊く。「へーきへーき」と軽い調子で返しなが、ふとその手元に目を向けて、違和感を覚えた。

違和感の正体が掴めずにジーツと見つめていると、くーちゃんは剥いた蜜柑の実を一房

ちぎって、わたしの口に差し出してきた。

「はい、あーん」

言われるまま口に含んで咀嚼している間に、気づいた。

自分で食べる時には白い筋を取らないくーちゃんが、今は、丁寧に筋を取っている。

「蜜柑、美味しい？」

「美味しい！ もいつこちよーだい！」

「ふふつ。はい、どうぞ」

次々と口に運んでくれるから、雛鳥になつたような気分になってくる。あつという間に最後の一房まで食べ切って、安堵の溜息と共に呟いた。

「はふうー……くーちゃんの愛情を感じる味だあー……」

「そう？ 別に、僕が作ったわけじゃないのに」

「そりやそーだけど、なんていうかなあ……。あ、ほら。メイド喫茶でメイドさんがやるおまじないあるじゃん。『おいしくなぐれ、萌え萌えキュン』ってやつ」

「ああ、あるねえ。実際に見たことはないけど」

「あれだつてさ、料理を作るのは調理スタッフであつて、接客するメイドさんが作つてるわけじゃないでしょ。けど、おまじないを掛

けることで客側はより美味しく感じるんだよ。それつてさ、メイドさんの愛情を感じるからじゃない？」

「ああ、『情報の美味しさ』みたいな感じかな」

今度はわたしの知らない言葉が出てきて、

「なにそれ？」と尋ねる。

「例えば、有名なパティシエが作ったケーキを食べるとするでしょ？ その時に『有名なパティシエが作った』って情報を知つて食べるのと知らないで食べるのでは、知つてる方がより美味しく感じるんだつて」

「あー、なんとなくわかるかも。それが『情報の美味しさ』？」

くーちゃんが頷く。わたしも納得して、深く頷いた。

「確かに、それと似てるかも。くーちゃんがわたしに食べさせるために、わざわざ蜜柑の筋を取ってくれたのを見てたから、くーちゃんの愛情を感じる味だーって思ったんだよ」

「あ、気づいてたんだ」

「そりやーもちろん！ でも、そーゆーのはわたしよりもき、慎くんにやつてあげたら？」

「へっ？ あ、いや、そんな」

くーちゃんは、わかりやすく顔を耳まで真っ赤にしてうるたえる。

慎くんもわたしと同じく、蜜柑の筋は取る

派だ。彼のために蜜柑の皮を剥いて、筋を取つて、ダメ押し「あーん」——鈍感な慎くんでも少なからず愛情を感じて、酸っぱい蜜柑でも甘く思えてくるはずだ。

「ぜーったい、いいアピールになるつて！ 今度やつてみなよー！」

「む、無理だよ！ そんなことしたら、引かれちゃうかもしれないし……それに慎くん、『自分で食べれるから』って言いそうだし」

「あー、めっちゃ言いそう。でも、引かれるつてことはないと思うけどなあ」

慎くんは、くーちゃんにはなんだかんだ気を許してると思う。

わたしに対しては頑固で口が悪いし、木葉ちゃんに対しては過保護なお兄ちゃんつて感じだけど、くーちゃんと話してる時は、いつも通りしっかりしてるように見えて、少し気を抜いてる感じがする。多分、慎くん自身も気づいてないと思うけど。

「そういえば木葉ちゃん、全然話に入つてこないね。どしたの？」

こういう話にはいつも食いつくの。そう思つて、くーちゃんの肩越しに様子を窺う。わたしの視線に気づいた木葉ちゃんが、両手でひらいていたノートから視線を上げた。「あ、すみません。勝手に見ちゃつて」

さっきまでわたしが漫画を描いていたノートだ。漫画っていつても、ネームも立てずに惰性で描いただけのラクガキだけ。

「どんなの描いてるのかなって、気になってたんです。あ、蜜柑はまだ食べてないから、手は綺麗ですよ」

「それは、別に心配してないけど。……つまらないでしょ、それ」

わたしらしくない気弱な言葉が、ぼろっと零れ出る。

ヤバい、どうしよう。慌てて取り繕おうとしたけど、わたしが口をひらくより前に、木葉ちゃんが「そんなことないですよ」と笑みを浮かべる。

「いつもと同じ、読んでてわくわくするお話です」

いつも通りじゃ、ダメなんだよね。言いそうになつて、口を嚙む。

木葉ちゃんは純粹に楽しんでくれてるのに、こんなこと言ったら、いくらなんでも、性格が悪すぎる。そう、思ったのに。

「もしかしてスズカちゃん、スランプ気味だったりする？」

くーちゃんは、そんなわたしの内心を全て見透かすように、顔を覗き込んできた。

「……なんでわかったの」

観念して問い返す声が、自分でもわかるくらい、不貞腐れている。

くーちゃんは数瞬、目を泳がせた。それから、いつも困ったように垂れ下がっている眉をさらに下げて、苦笑いを浮かべる。

「その、木葉ちゃんが漫画の話してる時、……こう、なつてたから」

そう言つて両手を顔の横に添え、指先を後ろに向けてピンと立ててみせる。

わたしは思わず、耳を手で覆い隠した。二人には、わたしが鏡を見る時と同じように、この耳が猫みたいな形に見える。どれだけ表情や声色に出さないようにしていても、二人には感情が筒抜けだ。

ついさっきまで心が毛羽立っていたけど、くーちゃんの可愛らしい仕草で気が抜けて、落ち着いてきた。

素でやつてるのか、わたしを和ませようとしてやつてるのかわかんないけど、後者だとしたら大成功だ。

「なんていうかねー、今に始まったことじゃないんだけど」

コタツ机に身を投げ出すように、両腕を伸ばして背中を丸める。

「わたしがなんで漫画家になりたいって思ったのか、話したことあつたっけ」

「確か、幼稚園の時に先生が褒めてくれたからって言つてたよね」

くーちゃんが言つて、木葉ちゃんも小さく頷いている。

「そうそう。だけど、気づいちゃつてさ。先生が褒めてくれたように、お話を考えて絵を描いてみんなを楽しませることは、わたしにはできないんじゃないかって」

「どうしてですか？」

小さく首を傾げる木葉ちゃん。口には出さないけど、目が語っているように見えた。

『私はスズカちゃんのお話を読んで楽しいですけど』みたいな感じ。

彼女が楽しんで読んでくれるのは、いっだって、ひしひしと伝わってくる。

けど、だからこそ悩みも膨らむというものだ。

「だって、わたしが描いてるのは、わたしの考えたお話じゃないから」

言い切ったわたしに、少しの間キョトンとした目を向けていた木葉ちゃんとくーちゃん。二人の顔が、じわじわと気づきに染まってくる。

やっぱり、話したのがこの二人でよかった。別の人、具体的には慎くんだったらこうはいかない。

わたしが小さい頃、猫の世界で体験したこと。そのことをずっと信じてくれてたのは、木葉ちゃんとかーちゃんだけだ。

最近では慎くんもようやく信じ始めてるみたいだけど、それでも彼の頭が固いことには変わりない。これほどスムーズに理解してはくれないだろう。

「わたしは、自分の体験をそのまま漫画にしているだけなんだよ」

「そっか、それで悩んでたんだ」

「まあ、気づいたのは二年以上も前だし、難しいこと考えなくて描ける時だってあるから、ずっと悩んでるってわけじゃないけどねー。けど、たまに考え込んでじゃうっていかさ。わたしらしくないなあって思うんだけど」

「いつだって全力全開、全速前進。それがわたしのキャラというか、役割みたいなものだ。どんな人間関係でも、各々の役割分担がある。わたしたち幼馴染四人の間にも。」

「みんなに優しく寄り添ってくれるくーちゃん。持ち前の冷たさ、もとい冷静さでみんなを纏めようとかあがいてる慎くん。」

「いるだけで癒しを与えてくれる、みんなの妹みたいな木葉ちゃん。そんな三人に少しだけ足りない積極性を、」

持ち前の元氣溼刺さで補うのが、わたしの役割だ。そんなわたしが元氣を失くしてうじうじ悩んでるなんて、らしくない。

「なんか話したらスッキリしたし、また気にしないで描けそうかも！二人とも、聞いてくれてありがとね！」

だから、話を終わらせようと思って声を張ったんだけど。

「けど、それじゃあ根本的な解決にはならないんじゃない？ そういうのって、きつと、いつかは超えなきゃいけない壁、みたいな感じだと思っし」

くーちゃんは、おずおずとした様子ながらも、確かな芯を感じさせる声でそう言った。

「まあ、そうなんだけど。だったら、どうしろってのさー」

「たまに頑固になるし、妙に痛い部分を突いてくる。そんな辺り、普段はほわほわしてるくーちゃんも、なんだかんだ年上って感じだ。」

けど、そんなくーちゃんでも、流石に創作活動における壁の乗り越え方までは、考えが及ばないらしい。わたしが半ばダル絡みするように問い返すと、「それは……」と微かに呟いたきり、口を閉ざしてしまふ。

「私は別に、無理に変わらなくてもいいと思います」

横合いから、木葉ちゃんが口を挟んできた。すぐには彼女の言葉の意味を呑み込めずに、くーちゃんと二人して、木葉ちゃんの顔を見つめる。

「だってほら、プロの漫画家さんとか小説家さんでも、自分の体験を作品に活かしてる人って、たくさんいるでしょう？」

「そりゃそーだけど、そーゆー人たちは物語の中に実体験を上手く落とし込んでるじゃん。わたしがやってるのは、あったことをそのまま書き写してるだけっていうか……絵日記の延長線上みたいなんだし」

「けど、絵日記だとしても、読んでてわくわくすることはあります。描いた人の追体験ができるっていうか。この人の目線を通した世界はこんな風に見えるんだって、そういう風に思える作品って、すっごく魅力的だと思うんです！」

「いつになく力説する木葉ちゃんはコタツから出て、わたしの方に歩み寄った。わたしの右手を小さな両手で包み込んで、わたしの瞳を、まっすぐに見つめてくる。」

「スズカちゃんの漫画は、そういう魅力に溢れてるんです。だから、無理に変えようとしなくていい。私は、今のスズカちゃんの漫画が大好きなんです」

いくら、他の友達や家族よりも距離が近い幼馴染だからといって、この歳になってまで面と向かって『大好き』って言われるのは、すつごく久しぶりで。

それが、わたしの描いた物語を——わたしの目を通した世界のことを指しているのだと意識すると、途端に、目頭が熱くなってしまう。

ダメだ、ダメだ。感極まって泣き出すなんて、それこそ、わたしらしくなすぎの最上級だ。

「あ、ありがと。でも、やっぱり、何もかもこのままってのはよくないかなって」

溢れ出しそうな感情を隠すように、絞り出す声が早口になる。

「このままだと、作風もヒーローとロボットのワンパターンだし。かといって、わたしの今までの人生に面白い経験が他にあるかっていうと、ビミョーだし」

「けど、スズカちゃん、いつも元気で、何をすることも活き活きしてて、楽しそうですよ？面白そうなことに貪欲っていうか、色んなことに興味津々っていうか」

確かに、マイペースだとかフリーダムだとか暴走特急だとか（無論、主に慎くんから）よく言われるけど、正直、自分の振る舞いを客観視するなんて、今のわたしには難しい。

「んー……だったら、焦点を変えてみたらどうかな」

くーちゃんが人差し指を立てて、そう提案した。わたしが木葉ちゃんから手を離して「ショウテン？」と訊くと、くーちゃんはこくりと頷いて続ける。

「そう、焦点。スズカちゃん自身の体験で行き詰ってるなら、見る場所を変えてみるのも一つの手じゃないかな」

あ、レンズの焦点みたいなことか。けど、くーちゃんの言ってることは抽象的で、まだちよつとわかりにくい。

「例えば家族とか、学校の友達や先生、それに僕たちでもいい。周りの人たちのことが、スズカちゃんの目にはどう映ってるのかを、今までと同じように、絵日記みたいに描いていくんだよ。それだけでも、今までと違ったものが描けるんじゃない？」

「そうです、それですよ！」

木葉ちゃんが勢い込んで立ち上がり、興奮を抑え切れないうちに、くーちゃんの隣に小走りで駆け戻る。珍しく忙しない彼女の様子にポカンとしていると、

「スズカちゃん！ 次は、恋愛ものを描きましょう！」

さらに面喰らう発言が飛び出してきた。

「へえっ!? 恋愛ものって、よりによって一番わたしに縁遠いやつじゃん！」

「そんなことないです！ ほら、こんなに身近にいるじゃないですか！ もう十年以上ももどかしい片想いしてる人が！」

木葉ちゃんは満面の笑みを浮かべて、隣に座る人の両肩に、ポンと両手を置いた。

肩を掴まれた当人は、しばし茫然としたあと——瞬間湯沸かし器みたいに、一瞬で、顔から耳まで真っ赤に染める。

「そ、それって、僕のこと!?」

「くーちゃん以外に誰がいるんですか！ ねえ、スズカちゃん！」

「なるほど、確かにくーちゃんの恋模様は見て飽きないもんね。じれじれもだもだする恋愛漫画……これは新境地の予感だねえ……」

「す、スズカちゃん、目が怖いよ……」

慎くんとのことからやってきた回数もう数え切れなくらいなのに、未だに初心な赤面を見せてくれる。こんなに良好な題材が、すぐ近くに存在したというのに、どうして今まで見向きもしなかったのだろう。

「二人とも！ ほんつとにありがとう！ 時間は掛かるかもしれないけど、新境地開拓、頑張ってみる！」

「はい！ 成果が出たら読ませてくださいね」
「もつちろん！ 一番に木葉ちゃんに見せにいくよ！」

そうやって、木葉ちゃんと二人で盛り上がっていたところに。

ゆらりと、緩慢な動作で、くーちゃんが立ち上がった。

もしかして、慎くんのこと考えてた上にコタツに熱されて、のぼせちゃったのかな。そう思っただけで、

「よかったね、スズカちゃん。当面の懸念が解消されて」

「あつ、うん。……えつ、なにその喋り方」

「なんでもないよ。ほら、心配の芽も摘んだところで、そろそろ勉強に身を入れなきゃね」

ギクツ、思わず肩が強張る。

「あの、なんか、くーちゃん、怒ってる？」

「なんでそんな話になるの？ 僕はただ、スズカちゃんのお母さんに頼まれてるだけだよ。これ以上成績が下がらないように、みっちり勉強を見てやってねって」

あ、ヤバい。流石に、からかい過ぎたみたいだ。

「まあまあ、くーちゃん。まだ時間はあるんですから……」

「木葉ちゃんも、英語が特に苦手だったよ

ね？ 今からでも重点的に対策しないとね」

「わ、私もですか？」

木葉ちゃんにまで矛先が向く。まあ、言い

出しっぺは私じゃなくて木葉ちゃんだからね。普段は穏やかな人が怒ると怖い。漫画に活かすとすればベタなキャラづけだけど、割と

イイ味出しそうだなあ——なんて、呑気なこと言ってる場合じゃないんだよ！

それから、午後六時過ぎまで勉強会は続いた。休憩時間を除けば、ザツと四時間ほど、みっちり勉強したことになる。

くーちゃんと木葉ちゃんがそれぞれの家に戻るのを見送りに、わたしも玄関扉をくぐる。

一番先に出ていたくーちゃんが、パツと表情を華やかせた。

「慎くん！ 今帰ってきたんだ」

視線の先には、今まさに家に入ろうとしている、制服にコートを羽織った姿の慎くんがいた。小走りに駆け寄って彼を見上げるくー

ちゃんは、目をいつもより大きくひらいて、頬を微かに紅潮させて、声のトーンも高くな

って、なんというか、乙女の顔をしている。

「生徒会の用事、そんなに長かったの？」

「ああ。書類にミスが見つかって、全部チェックして修正してたから長引いたんだよな」

「そっか、大変だったねえ。おつかれさま」

「……ん。お前こそ、こんな時間まで勉強会してたんだな」

慎くん単体だと憎らしいけど、やっぱりあの二人でいるところは見てて飽きないなあ。

そう思っただけでなく、隣に並んだ木葉ちゃんを見る。

木葉ちゃんは、眩しそうに目を細めて、慎くんとくーちゃんを見ていた。その横顔は、どことなく物憂げに見える。

「——やっぱり、木葉ちゃんも見てて飽きないよ」

「私、ですか？ えー、私なんてなんにもないですよ」

我に返ったように顔をこつちに向けた木葉ちゃんは、困り笑いを浮かべてそう言った。

多分、自分がどんな顔をしているか、自覚ないんだろな。

「わかんないならいいよ。あ、そうだ。蜜柑ちよつと持つてく？」

「いいんですか？」

「いーよいーよ。お父さんの実家からめっちゃ送られてきたから、家族三人じゃ食べ切れなくてねー。おーい、慎くんとかくーちゃんも」

「！」

ちよつと周りに目を向けただけでも、こん

なに見てて飽きない幼馴染たちがいる。

そしてわたしは、いつでも三人の様子を傍から観察することができる。

このポジションも、なかなかに役得だ。

愉悅に満ちた気持ちと一緒に、夕日の灯りが翳って、わたしの一日は終わりに近づいていった。